

量は前文に記し有ごとく也。

〔培養秘錄 四〕穀肥ノ用法ヲ論ズ

翁玄明佐藤曰、草木類ノ培養ニ用フベキモノノ都テ十二種アリ、第一穀肥、第二苗肥、第三芝草肥、第四草木埋肥、第五草木腐肥、第六厩肥、第七草木灰、第八糞肥、第九糠肥、第十油糟、第十一造釀物糟、第十二水藻是ナリ、能其土地ノ剛柔ト、氣候ノ溫冷トヲ察シ、作物ヲ適悅シ、十分ニ豐熟セシムルヲ良農家ノ手段トスル也、穀肥トハ穀類ヲ肥養ニ用ユルヲ云フ、總テ粳米糯米ヲ始トシテ、大豆、小豆、豌豆、祿豆、蠶豆、鵝豆、大麥、小麥、蕎麥、黍、稷等皆此ヲ用ユベシ、然ドモ粳米糯米ヲ糞培ニ用ユルコトハ、近來制禁トナレリ、凡ソ穀類ノ實ヲ生ニテ糞培ニ用ユルトキハ、其滋潤温煖ノ性ト、生氣發達ノ勢トニ因テ、其作物ノ精神ヲ、專ラ莖葉ト穗トニ上湊シム、故ニ能其莖葉ヲ肥大ラセ、殊更ニ其種子ヲ十分ニ實セシム、是其天性ニ從フ法ナリ、然レバ根ヲ需テ作ル者ニハ、穀類ノ肥ヲ用ルハ無益ナリト知ルベシ、

〔草木育種上〕澆灌并培養の事

按るに山野自然に生ずる草木は、實熟して自落腐爛すれば、則その物の肥となる也、冬木は葉繁て暑寒を厭、夏木は秋葉落て土を覆ひ寒を凌、是自然の理なり、玄かるを實を採盡、或は葉を掃除などするは、理に逆もの也、故に手入培養の法を用ざれば、生長せざる也、花鏡云、人力亦以奪天功と誠に然り、又曰、澆灌人之需飲食也、不可太饑、亦不可太飽と云り、凡草木に用る肥二十一品あり、後に審にす、又人糞馬糞などの穢物を嫌るものあり、種樹書曰、花木有不宜糞穢者甚多、尤宜問用之、非其宜立稿と云り、蘭百兩金、杜鵑、虎萩、枇杷、杜衡などに糞を用事を忌が如し、又神社の庭或は神前に供するは、草木等にて、糞穢の物を用難事あり、かくの如き時は代に用る肥あり、干鰯、灰汁、油糟、酒粕等を合せ腐して用ば、大抵同様に肥るなり、左傳曰、蘋蘩蕰藻之菜可薦於鬼神と云、これ水